

2D-67

特15
84

禪學入門

曹洞 大智禪師垂示
同 五庵老人垂示
臨濟 白隱和尚垂示
合卷

甲申十月發兌

東京佛教書肆

鴻盟社印行

東京圖書館

部	類	架	號	冊
新書門	七十	七		

019606-000-8

特15-84

禪學入門

大内 青巒/編

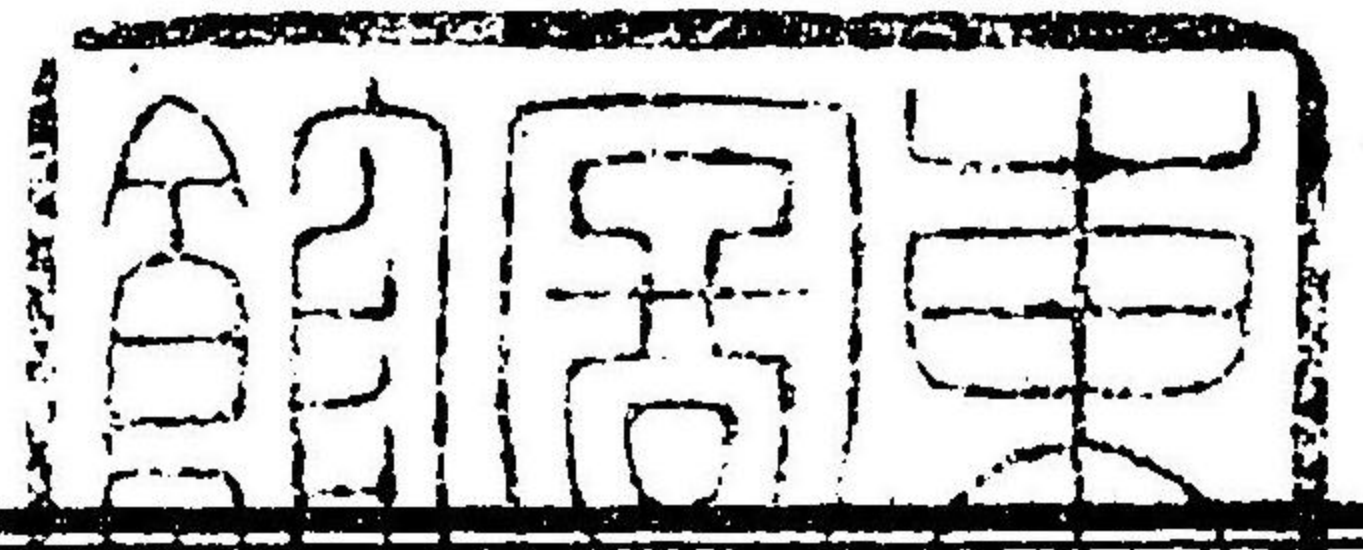
M17. 10

ABG-0386



汝等諸人自心是佛更莫狐疑外無一物而能建立皆是本
心生萬種法故經曰心生種々法生心滅種々法滅若欲成
就種智須達一相三昧一行三昧若於一切處而不住相彼
相中不生憎愛亦無取捨不念利益成壞等事安閑恬靜虛
融澹泊此名一相三昧若於一切處行住坐臥純一直心不
動道場眞成淨土名一行三昧若人具二三昧如地有種能
含藏長養成就其實一相一行亦復如是今說法猶如時
雨溥潤大地汝等佛性譬如種子遇茲霑洽悉得發生承吾
旨者決獲菩提依吾行者定證妙果

右六祖大鑑慧能大師二種三昧垂示錄以爲禪學入門
序 甲申十月 後學 藹々居士



○禪學入門序言

禪とは梵語つぶさには禪那と云ふ此に譯して靜慮となす乃ち菩薩六
波羅密の一なり蓋し釋迦老人の道を闡き教を布くや一切衆生の身心
智徳を區分して十界となす而して其一の果位にして其九の因位なり
因位の九は菩薩と緣覺と聲聞と天堂と人間と修羅と餓鬼と畜生と
地獄なり地獄より上み天上に至るまでを凡夫と謂ひ聲聞緣覺菩薩を
三乘の聖者と稱す聲聞は四諦を修志緣覺は十二因縁を觀志而して菩
薩の六波羅密を行志て果位の佛地に證入す六波羅密といふ布施と持戒
と忍辱と精進と禪定と智慧となり又之を約して戒定慧の三學と謂ふ
乃ち持戒と禪定と智慧となり慧學は便ち智識を研磨し定學即ち禪學
以て心を練り戒學以て身を修む然り而して修身と云ひ智識と云ふ皆
一心練磨の如何に依る者なれば戒慧の二學は車輪の如く禪定の學は

車軸に似たり軸若し堅固ならずんは輪はた何に依て轉するを得ん是れ其禪學の諸學中に於て尤も肝要たる所以なり其れ然り禪學は専ら一心練磨を主とす而して一心練磨の要は自心の眞性を發見するに在り是れ之を見性と謂ひ悟道と稱す夫れ此道既に悟り此性既に見るときは天地世界森羅万象もろくの事物情態悉く皆な其眞性實相を透見することを得て身自ら能く世界の主宰となり能く万物を使ひ得て一切事情に活達自由なることを得べし是れ古來英雄豪傑の其文士たると武夫たるに拘らばす其僧俗男女たるに論なく概ね皆禪學に入り禪機を得て而して後に進退去就自由自在なることを得る所以なり方今世人漸く此學の急務なることを知り徃々其捷徑を求る者多し然れども家を捨て寺に入り師に參じて道を問ふことは尋常士民の能く爲す所に非ず然らば則ち祖録を讀み公案を閲して獨學獨悟せん乎祖録

公案固より智解情量を以て窺測し得へき者も非ざるを如何せん然るも余此頃古簡堆裏を探りて二三の禪話を録せる者を得たり其一は大智禪師の垂示に於て其二は卍庵老人の法語其三は白隱和尚の法語なり皆是れ婆説紛々たる兒を憐みて醜を忘るゝ者謂ゆる教外別傳の旨に於て鵬程万里を隔つる者ありと雖も猶ほ是れ門を敲くの瓦よく他を去て門戸を開りまむることを得は釋迦一代八方法藏の經論も亦た三舍を避けざるを得ざる者あらん仍て之を合刻して禪學入門と名け彼の捷徑を求て而して未だ得ざる者の爲めにす大智禪師は承陽大師六世の法孫肥後國宇土郡に生れ法を大乘明峰に嗣き支那に遊て諸老より請益し歸朝して化を加州及び肥後に擧ぐ肥後太守菊池武時入道寂山つとに禪師に參じ頗る省悟あり此法語も亦た寂山に示す所なりと云ふ禪師文詞巧妙其詩偈古今傳誦す雪中寂山に示す詩に曰く一夜庭

前三尺雪。寒威徹骨立人稀。少林斷臂得髓旨。只許棄身來者知。寂山入道は南朝の忠臣世人偏く之を知る故に贅せず。正庵老人は曹洞宗の碩徳なり未だ其出處進退を詳にせず。白隱和尚は臨濟下の尊宿なり諱を慧鶴と曰ひ鶴林と號す。本年五月勅きて正宗國師の號を賜ふ實に近古以來傑出の老禪師なり其傳は此頃余り校訂印行せし。續日本高僧傳卷八に詳なり故に此に略す

明治甲申十月

東京 藹々居士青巒識

禪學入門

藹々居士編輯

○大智禪師示菊池寂山入道法語

生死しじの大事を了畢せんとおもはばいまつ無上菩提ぼつだい心をおこすへし菩提心ぼつだいしんとは無常むじやうを觀する心これなり大凡そ天地のあひだに生をうけて陰陽の氣をうくるもの終に變滅に歸せずといふものなし是れ無常の殺ころ鬼人をうかふこと時として其時ならずといふことなし故に經きやう（遺經いけい）に曰く是日已も過ぬれば命もまた隨つて滅す少水の魚の如し斯に何の樂みある衆等當も勤めて精進しやうじんし頭燃づなを救ふが如くすべし但無常を念じて慎んで放逸なること勿れどこの無常の殺鬼に命を奪はれぬれば冥々たる生死の道ひとりゆきて妻子珍寶國城王位ひとつとして身にまたがふものなく一生の中に貪欲愛戀せし五欲の念々化して劍樹刀山となり前路をさへざり歩々に身をやぶり魂をきやさすといふ

ことなし終に冥府に歸しぬれば在世所作の業に去たがつて地獄鬼畜に生を受け百劫千劫のあひだ一日に千死万生して酸苦ひまわらず此理を聞て夢幻泡影よりなほあだなる一生の身をすてずして幾回生死の苦域に歸りて万劫酸苦をうけんことを離り悲しみいとはさらん是故に佛道を求むる人はまつ生死事大無常迅速なることを胸におきて念々にこれを忘るゝことあかれ若し此心なくは眞實之を求むる人にはあらず夫れ生死の大事を截斷することば坐禪にすぎたる要徑なしいはゆる坐禪は靜なる處に蒲團一枚を安じ其上に端身正坐して身みなすことなく口にいふことなく意に善惡をはからず唯志つかに壁より面ひ坐して日を送る此外に何の奇特玄妙の道理なし然れども光陰虚しく度らざるなり身心内外中に生死の二法いづれのところに有りや點檢して知るべし若し有りといはば我も呈し來り看よ若し無くん

ば尋常人にむかひてうちある底の自己をおこたらず忘れずして護持荷擔すべし自然に月ゆき年つもれば此人にむかひうちある底の自己のづから忘れて通身行道する人となるなり行道とは道を行せよといふにはあらず咳唾屈伸ことごとく西來意なるをいふなり此三昧の不可思議現前するときは地水火風分散し五根六賊昏昧ある中にも生死の路頭におゐては主宰となるなりこの三昧現前するを坐禪に參得するといふ又祖師の活句に參得すともいふありたどひ伎倆をもて自己の本地風光本來の面目を見得して分明に疑ひなしとおもふものあるも此三昧の妙處現前せざる底はみな隨身の窠窟なり眞實の禪はあらず近世本朝には活句といふ名字だにも聞かす悲志むべし初心の坐禪のときは必らず昏散することありこれに坐禪に打むかふときに起るあり必らずしもわざと坐禪をばせずとも坐の見聞覺知たゞ尋

常にかはることなく靜にうちめたるばうりにて道にむかふこと勿れ
 昏散はすべてきたらぬなり道を行するには必らず魔の來りてこれを
 遮ぎることあり道を行することなければ遮ぎることなし坐功つもら
 ば自然にこれをしるべし路遙にして馬の力を知り事久しふして人の
 心を知るなれば佛道は順逆の中に長遠の志ざしを堅く持つを眞實擔
 當の人といふなり生死の根本は我が本とするなり行道の日つもらば
 吾我名利の心は自然よ生せず若し生せずは先づ擔當の志るしと知る
 べし行道の人在家の菩薩としては随分に五戒を行持すべし當世の人
 佛法をは放下すといへども貪欲をは放下せず我意にまかせて行する
 あり最ども憐愍すべきものなり眞實の道人は佛すらなほ心頭よおろ
 ず况んや貪愛五欲をや當世様の茶香驕奢のたぐひ并ひに捨物放下の
 類衣服の振舞まで一切實志あらん人はこれをは禁止すべしまた當世

宗門を行する人三寶を敬せず善根を修せず唯自在無碍をのみ禪とす
 るもの多くさはぐなり是れみな波旬の流類なり古人有漏の善根色身
 の佛相を堅執邪信するを放下せしむることは皆ろの謂あるなり謂ゆ
 る生死の作業念々休歇するといふども佛説に心を忘せずは猶ほ是れ
 微細生死の根本あるゆへ法身法性の上の迷とていましむ况んや色
 身有相の如來をや一念も愛着するをは皆放下せしむ當世澆季のとき
 法は弱く魔は強くして佛法をば皆放下し三毒法愛をい堅執してこれ
 を行す顛倒の甚だしきこと何事かこれに如かんやこれをしらざれば
 天魔の眷屬となることを辨まへて委細辨肯すべし佛道を行せん在家
 の菩薩は衣食住の三つ節儉すべし驕奢名利を好むことなかれ衣は寒
 暑を防ぐばかり食は行道の命さへさゝゆれば足りぬ住處は風雨をさ
 えるのみなるべし三界のうち一念の心をとゝむることなかれこれ

道人最初の用心なり先の日三寶の御前に焼香發願なせし様に行道の資縁ならぬ外をはとることなうれ有漏の業報きたりの予まは之を捨ること糞土泥唾のごとくよしてとることなかれこれ在家の菩薩最上の用心なりとのたまひき此願を堅固に發しまします故に十二時の行持をも書きてすゝむるなり堅固に護持したまふべきものなり至祝々々 (十二時法語略す)

○出庵老人示某官人法語

夫れ佛道長遠なりと雖も畢竟大地に寸土なし三大阿僧祇劫に修証辨成すと雖も真心遠からず五百里峻難の路あるも寶所近きに在り參禪學道の人若し一步を誤まり一念を動すれば十萬億土百千萬劫を隔つ直又須く見性成佛すべし如來一代の經教は見性の開示にして其見性悟道に至ては教外別傳不立文字なり利鈍貴賤出家在家東土西天古代

今時の差別あることなく只道心の有無と開示の邪正によれり千佛万祖指南するとも自から信心純一正念相續せざれば見性悟道の時節あるべからず是れ自心を以て自性を悟り己眼を開て己身を明らむる所以あり若し正念相續せず工夫純一ならざれば徒らに海に入て砂を算ふるのみ其正念とは無念なり工夫とは無想なり祖師承陽大師曰く非思量底を思量する是れ坐禪の要術なりと十二時中動靜に一味し理事に一色して猛烈に工夫せば内外の諸魔便を失ひ一切の障礙を離れ善惡是非苦樂順逆一時に脱落して無始劫來無明の命根を截斷し空劫已前本來の面目に相見せん空劫已前とて遠き久き事に非ず古き昔の事と思ふべからず即今見性の端的なり放身捨命の時節なり念佛誦經も同く是れ命根を截斷するの利劍なりと心得べし功を積み徳を累ねて往生見佛すと思ふべからず福德果報を求ること勿れ殊勝奇特を離却すべし三

世心不可得なれば正念自ら現前す行住坐臥專精に工夫して見聞覺知喜怒哀樂の主人公を疑着せよ若し着力微弱なる時は眞疑現前せず妄想除き難し早成を得んと欲せば心王附與の寶劍を提て一氣に進み佛に逢はば佛を殺し祖に逢はば祖を殺し父母に逢はば父母を殺し衆生に逢はば衆生を殺し乃至有情無情森羅萬象山河大地三世十方善惡是非其外六根門頭七識街邊に出沒去來するもの一切皆殺し盡して大虚空界を翻身出頭せば眞の大丈夫と謂つべし這裡に到て諸佛衆生菩提煩惱生死涅槃天道地獄惣夢幻空華なることを疑はず且つ參禪は刹那も油斷あるべからず出息入息精神を抖擻し前歩後歩脚下を點顧して匹馬單刀百万の敵軍に驅入るか如くせよ只動靜の二境に對して工夫純一ならざれば少分の相應も得がたし正念工夫は動作中最とも修練すべし必らずしも靜を好むべからず往々靜あれば修行事速か

なるり如く思ひ動中は散乱するり如くに思へとも靜處の修練得力は動境に對するるときに確實ならず臆病懦弱の働らきある者なり然らば何をか得力と云はん正念工夫とは十二時中吾に有る三昧吾も亦た不知なり終日作務辨事すれども疲勞あることなく長時獨坐默立すれども退屈せず理事一色して究明するを實參實學と云ふ早く諸法に通達し万事も自在なることを得んと欲せば動中の工夫に越たるはあし故に辨道參立の衲子は聲色堆裡に向て坐すべしと三祖大師の曰く一乘に赴かんと欲せば六塵を惡む勿れ是れ六塵を喜ひ好めと云にはあらず水鳥の水に入れども翎の濡れざるり如く平生六塵の上に於て取らず捨てす正念相續せよとの開示なり若し亦た六塵を嫌ひ避けは聲聞の根性も墮して永く佛道を成せず明かに見性し去らば六塵即ち禪定五欲即ち一乘にして諸法實相なり動靜不二の大禪定に入て身心共に

脱落す最初より六塵五欲を嫌て修行する人は假令心念空寂に觀想明
 了なるも靜を離れて動境と交はる時恰も魚の水を失ひ猿の樹を離れ
 たるが如し深く山林に入て永く塵縁を絶し木食齋戒する人すら工夫
 純一には容易になりかたし况んや假名けいめいの出家兒けいじ薄實はくじつの在家渡世の作さ
 業紛紜たるをや誠に大信決定するう大疑充塞するう大願發起するう
 大死到來するかに非されば理事動靜工夫純一なりかたし専ら光陰を
 惜み露命を願て欲塵の中にも只管に工夫し驀直に進歩せば鉄壁放開
 し須彌踏破する底の大歡喜を得て塵中の主宰となるべし喩へは火中
 に咲たる蓮華の火氣に逢てうたゝ色香を増すが如し謂ふこと勿れ在
 家塵欲の身にして坐禪志難し世務繁多にて工夫なり難し或は仕官奉
 公の身ゆへ修行すること能はず貧窮多病にして辨道力に及ばず是
 れ皆信心起らず道念薄きか爲あり生死事大なり世間實に無常ありと

觀すれば菩提心增長して吾我ごが名利の偷心ちゆうしん漸く盡却し理事一色の坐禪
 辨道となる譬へば人あり群集の中にて一人の愛子を失ふか大切の財
 寶を落失せんに物さはがしく人目多しとて捨置くべきや家業繁多困
 窮多病なりとて尋ね申すまじきや群集多勢の中へ入ても夜を日に繼
 ても一回尋ね出して我手に入らぬ限りは心中穩かならざるが如し偶
 く人となり正法を見聞するは千生の一遇なり然るを渡世名利の爲
 めに坐禪工夫を退廢するは諸佛の法身ほうしん慧命えいめいを世財よりも輕んずるな
 り其愛子を失ひ財寶を遺落するが如く專念に尋ね求めば一度逢ふて
 喜悅の眉を開かずと云ふことなし夫れ公卿太夫士農工商ともに千種
 万般の家事あり何ぞ終日黙坐靜觀するの暇あらんや此に坐禪工夫を
 修得せざる禪師ありて強て幽閉寂靜を教へ聚落市塵を嫌ひ事務作業
 の中には參禪工夫ならざるよしを示して學人をして用心を錯らまむ

聞く人これが爲めに難作難行の思をなして發心修行を退廢し捨父逃逝して生々客作の賤人せんじんとなること實に哀むべし宿因にて深き志あるも道の爲め家業を怠り公務を疎かにし忠孝信義を失ふに至る古人の云へる如く今人も戀き色を好む程に切なる道念あらは如何ばかり多用の身分繁華の住居たりとも工夫相續して大疑現前せずと云ふことなし古人今人共に作用の中に多くは悟道見性せり三世十方六道四生一心の所現ま非ずと云ふことなし心生ずれば種々の法生じ心滅すれば種々の法滅す一心不生なれば方法どがなし是故に縦ひ深山溪水寂莫清閑の處に居て默坐靜觀するとも心猿意馬の路絶せされば空く光陰を送るのみ三祖大師曰く動どうを止めて止しに皈すれば止更に彌く動す若し妄念を除き眞如を求めんとせば精神を勞し元氣を損して疾病發するのみならず昏沈散乱して魔坑に落つ宜く止觀しくわんの二法を用て

戒定慧を圓にすべし止觀とは止は禪定なり觀は智慧なり止の時は心意識の運轉なく一切の非法非律を防ぎ無明の命根截斷して僧俗の戒法輕重共に破犯ある事なし觀の時は身に行相の愛執なく一切の我見法見を空し無始の業障を滅除して自己の靈光内外普く照破せざることなし觀の外に止なく止の外に觀なし空假くわの二法を兼帶して中道第一義を成立す坐禪の儀則工夫の用心佛祖傳來の相承そうじょうあり亦た聲聞せうもん二乘天人外道等の坐禪あることを知るべし無上道を志す者の佛祖の坐禪を修學すべし佛祖は始より衆生を忘れず大悲を起したまふ結跏趺けつかふ座ざ端身正念止觀調息は坐禪の要術なり清閑の室或は樹下石上にても厚く坐物ざぶつを敷き身の衣帶を寬くして坐せよ先づ右足を曲げて左の股の上に置き次に左足を右の股の上に安じ而して右の掌を左足の上に置き左の掌を其上に重ねて両手の大拇指を向ひ拄たへよ仰がず俯がず

端直にして耳と肩と對し鼻と臍と對し眼は常の如く開て鼻端を守る
 べし閉目して昏睡を招くこと勿れ心を左掌の内に安住して氣は丹田
 腰脚等に充塞せしめよ臍輪氣海を張り欠氣一息して唇齒を閉ぢ清氣
 鼻より入て微息相通じ急ならず緩ならず出入相覺へ非思量底を思量
 し兀々地に工夫せば元氣自然に充實して臍腹瓢の如く鞠の如くなら
 ん安詳徐歩一息半跣直路順回の經行の軌法あり若し定より起て經行
 せんと欲せば按摩搖振して安詳に起つべし緩歩して直路を經歷せよ
 先づ右足を移し左足次て運べ歩を移すこと半跣の量にして足を運ぶ
 こと一息の間なるべし而前七尺計の地を觀して身形端直に歩して廻
 らんと欲せば右に廻るべし前歩後歩工夫純一ならば眞理現前して脚
 下無私ならん調息の法は坐定の後心氣を氣海丹田に養ひ臍輪より逆
 上せしめず鼻孔より息を通じ急あらず緩あらず喘せず風せず出息と

知り入息と覺照して意識を息に緣じて上下出入せしめず思惟分別せ
 ず情解ト度セず只管に出入息を覺へて一息も放失せず工夫相續せば
 四大調適五臟皎潔にして上部清涼下部温煖身心自然に大歡喜を生ず
 べし行住坐臥共に空々寂々照々靈々を存せば憤志一番猛烈に激發せ
 よ此時に至り微塵毫末も意識分別して安樂見性の思わらば百劫千生
 もも生死を出ること能はざらん深く信心決定して大死到來の工夫を
 憤發せば忽然として桶底を脱却し丹竈を掀翻して一念も万劫を超過
 し一足に三界を踏破せん般若多羅尊者の出息衆緣に涉らず入息蓋界
 に居らずどのたまひしこと何の疑ひ怪むことかあらん初心未熟のと
 き氣息結滯して調はざるときは前後左右へ身相を搖振して神心清爽
 あらしめ臍下の濁氣を吐くこと一息或は三息して鼻息相通じ鹿より
 細ならまめ微々として出入せしめよ若し又昏沈或は散乱せば息を數

へて一より十に至り捨てまた一より十斯の如く十の數を極として數へて正念に出息を觀照すべし或は四大分離を觀し骨肉還本を觀じ九相六喻等を觀するも亦た得たり内觀養生の秘訣仙家鍊丹の妙術も佛教調息の法に本けり精く心を用るときは坐禪は實にこれ現當安樂の法門なり仙書に曰く養生の要は形を鍊るに如かず形を鍊るの妙は神を凝らすあり神凝るときは氣聚る氣聚るときは丹成る丹成るときは形固し形固きときは神全たしと知るべし長生不老の仙丹果して外物に非ざることとを臍下一寸半を氣海と云ひ元氣を收め養ふ所なり其下を丹田と云ふ精神を鍊合するの府なり神氣常に此内に充實するときは無病堅固にして不老長命あり是故に真人は氣を使はず精を勞せず神を屈せず養生の術は國を守るに齊しと夫れ神は君の如く精は臣の如く氣は民の如し其民を愛するは其國を安んずる所以なり其

氣を惜むは其身を全ふする所以なり氣竭れば身死す民散ずれば國亡ぶ明主は心を下に専らにし暗君は意を下に恣にす上に恣にするときは臣僚寵を恃み權威に傲りて下民の困窮を顧りみず斂臣貪り掠め酷吏僞はり剝ぐ忠良隠れ生民恨む心を下に専らにするときは收納廉直に志て賞罰乱れず法度正しく豊儉節に應ず土肥へ國強く産豊かに穀登る地に荒なく民に飢おし人身も亦た然り精氣常に丹田に充るときは内凶動くことなく外邪侵すこと能はず六賊退散し四魔潜伏し筋骨堅く血脉通じ心安く神健やかなり若し邪境に奪はれ妄縁に引れて正念工夫を失はば魔事競ひ起り業報集り責む破戒放逸邪見我慢增長して佛種を斷滅するに至る憐むべし人々智慧徳相を具足し如意寶珠を圓滿しなから自ら下劣の凡夫となり窮子となりて多くは云ふ下根なり病身なり業障なり因縁なり無師なり末法なり仕官なり在家なり又

云く親子あり眷属あり家業あり世用あり垢穢あり煩惱あり明日あり
 來年あり時節あり來世ありと自ら懈怠し自ら怠屈し放逸隋弱にして
 發心修行せず參問工夫せず參禪學道せず三毒五欲を持前とし詔曲名
 利を日送りとして値ひ難き今生を虚く過すのみならず無始已來の罪
 業を累ねて未來永劫えいこくに七難八苦を受ること尤も悲しみ怖るべし偶た
 ま人身を受け忝けなくも佛教に値ひながら自心の起滅を會せず我躰
 の歸趣を知らず生得の富貴を捨て本具の光明を埋没して佛性ありと
 だに知らず悲むべし正法衰滅し人智下劣にして得道の入少あく真正
 の師罕なり今時の學者發心元來正しからず行脚ぎんかく多くは邪路に走る中
 下の機は置て論せず上根大志と稱せらるゝ人も往々名利を發心とし
 我慢を志氣として師友の正邪を揀別せず強て証悟奇特を求め自己の
 身心を放捨せず専ら出世名譽を望むたまく精進勇猛に似たるある

も事に觸れて退惰し縁に對して間斷し功夫相續せず大疑現前するこ
 となし惜い哉終に黒山鬼窟裡に死在して斷見滅見空見を起し或は神
 通光明裡に住著して佛見法見常見を生ず或は惶々寂々靈々照々を認
 得して如々法性の計校をなす明眼の智識も見ゆるも己見こけんを抛ちて學
 道せず祖師の公案に參するも精細をつけて提撕せず難透難解の機關
 理致意識妄解して透脱と稱す其師家たる者も心路絶せず意句到らず
 魔事現境の處に活計を作して戒律を犯し因果を怖れず却て看經禮佛
 只管打坐すくわんたざの一色辨道を放下し掃地汲水拾薪設食の鍛鍊長養を嫌ふ猿
 林恰も十字街頭の荒物店のことく詩歌文頌書畫算印茶香醫易其外六
 藝方法を弄斷して君臣無禮の安否を結び賓主度世の食輪を轉し機に
 隨ひ求に應じて買賣交易す是を接衆せつしゆ爲人の手段と云て可ならんや參
 禪辨道の志氣と名け難し假令ひ智慧は舍利弗しよらひつの如く神通は目蓮の如

く富樓那の辨舌を具し阿難の博識を懷きて理として究めすと云ふことなく義として通ぜすと云ふことなく法として明らめずと云ふことなく神通光明を放出し風雨雷電を變化し鬼神猛獸を調伏し坐脱立亡を自由にし徳は王公の師となり名は權化の佛と呼ぶるも財色名利を抛たずんば正念相續の人と云ひ難し嗟呼僧俗共に道念輕薄にして利名を放捨する底實に少れかり故に諸方皆說禪講經を宗風とし廣衆潤澤を繁昌とし博學多才を智恵と思ひ名聞威勢を道德と稱す生死岸頭臘月三十日何の用を作すにか堪ん一朝病病を受くるときは妄念轉た増して心火逆上し苦痛惱亂す一息截斷の後閻魔大王怒眼を張り鉄棒を撚りて相問はんに笑止千万の風情なるべし熟々世間を觀するに病も害せらるゝより妄念に殺さるゝもの多し妄念は毒蛇よりも怖るべし妄念を離るゝときは病は實に是れ善智識なり古へより重病苦痛

と戦ひて得力見性の人數多なり若し重き病を受るときは死を畏れず生を顧みず忍辱の鎧をかけ忠義の弓矢をたはさみ勇猛の馬に跨かり精進の鞭を握り唯一乗の旃を押して少欲無我を兵卒とし譜代の正念工夫を大將とし氣海丹田の心王城を堅め五形鍊丹の兵糧を貯へ無念無想の計畧を廻さは四百四陣の病將一時に蜂起し八萬四千の魔軍を後詰とし八識七情より攻め入るとも少しも惶れず終には心王の仁慈に皈し大將の威勢に伏し兵卒の勇氣に畏れ戈を倒し膝を屈して降参せんとし十方に敵なく全体に苦なく正邪一如四海太平を歌ひ二世安樂を得べし昔し蒙山異禪師は痲病を憂ひ惱みて十死一生のとき苦痛と戦て坐禪せり少時ありて腹大に鳴動し痲病即刻に平愈して大に悟入せりと云ふ又予か朋友に雲州の僧某は大傷寒を惱みて絶食すること八日大熱にて舌も焦け晝夜の分ちもなく苦みけるが師家に呵嘖

せられて未悟を悔え前非を知り忽ち大誓を發して必死の念に住し臥具を擧み齒を喰ひ縛りて勇猛に坐禪工夫しければ病惱邪熱頓に消散して内外清涼身心歡喜地に入て本來不可得を證す予も二十八歳の冬諍論の難事ありて毒藥の害に逢ふ全体焼痛して暫時の間手脚物身紫黑色とある其苦惱の劇切あること言を以て宜べがたし無間焦熱の苦みも此上はあるまじと思はれたり時に大慚愧を發す抑々十七歳を初發心として正師を尋ね叢林に入て參禪辨道志水に立ち雪に坐して脇を席に着けず夙夜に忘却せざること十年餘越後の長泉寺に冬安居して元綱老師の鉗鎚を受け生死を透脱し自己を脱落せりと思へり今此の毒藥に苦められて轉處自由ならざることうはと大勇猛を發し劇苦と戰て趺坐す此時未だ初夜を打せず正念調息して四大分離觀に入る氣息忽ち滅尽して真觀現前し性相共に忘却して正念相續す時に鐘

聲の來て虚空に響くあり我^か牀^た人^{にん}相^{そう}を觀照するに一亘の虚空に針を掛けず親く那吒の本身說法を解す身体を動搖し手脚を屈伸すれば柔輭皎潔なること尋常と大に異なり前來の苦痛昨夜の夢の如く全体の色も亦た常の如し身心に大慶快を生じて安詳として坐を起ち窓外も出でて、東方を見れば最早や曉明なり少時ありて吐瀉一時に來る恰も臟腑皆盡て皮骨のみ連立するう如し活中に死を得て死中に活を得ること毒藥變じて甘露の妙藥とあるも似たり初て憎愛の二見を離れて冤親平等を證することを得たり偕又昔しも勇施菩薩の如きは禁戒を犯して苦惱の中に大誓を發し頓も無生忍を悟る數千の蚊子にさゝれて痾痒と戰て悟入するあり或は身體を割切せられ皮肉を焼針し苦痛と戰ひ契悟するあり雲門大師は折脚せられて大悟し蟬川親左衛門は喧嘩の席にて省悟し尊氏將軍は陣中も安心す其戰ふと云ふは彼れを怖

れず彼れに與せず唯正念工夫を押立て無二無三も進めば苦痛も妄念も一團の精神となり一色の辨道となる若し正念工夫を失するときは妄念邪氣の爲めに今生の身心を賣め苦めらるゝのみならず未來永劫の生死を相續して大苦を受くること古へも今も僧と云ひ俗と云ふ擧て計り難し抑も君として正念工夫なきは生民を安んずる能はず臣として正念工夫なきは忠義を全ふすること能はず民として正念工夫なきは孝信を竭すこと能はず是故に返すくも信心決定して行住坐臥喫茶喫飯屙尿放尿一切の事業を打して一則の話頭となし正念工夫暫くも間斷なかるべし參禪は神氣健かに工夫猛烈ならんことを肝要とす自ら輕賤し自ら懦弱に自ら下劣なるべからず佛祖も是の如く我も是の如し舜何人予我何人予聖人も眼橫鼻直我れも眼橫鼻直出息入息他の鼻孔をからず前歩後歩他の脚を用ゐずと常に超佛越祖の志氣を隕

さず自心の根源に就て參じ來り究め去るを大丈夫の意氣と云ふ這裡に到りて出家在家を問はず男子女性を論せず利鈍賢愚を分たず繁務無事を掙はず大誓を立し大願を發し大信を具し大疑を起すもの見性悟道して佛祖の皮肉を得すと云ふことなし少林の総持曹溪の淨居了然道意如大慧春妙總未笑の如き女性にして志氣大丈夫に超へ修証佛祖の機關を透得す維摩龐老陸亘裴休陳操大年東坡無盡其外竺支扶桑に於て明王賢臣居士夫人等の見性得法するもの百千に至る此身今生に度せずんば更に何れの生をか待たん今日已に過ぎぬれば壽命も亦た隨て滅す念々世相の無常を觀じて明日ありと思ふことをやめ歩々心源の大道を躓て別路に向ふことなかれ直に須く万仞峻崖に手足を放て身心一時も死却し去れば恰も大虚空の正中に立つが如く瑠璃瓶の中央に坐するに似て忽然として凡に非す聖に非す佛に非す心に非

す物に非ざる底の大境界を突出し心佛衆生第二人なきことを徹證せん是は此れ諸佛の法身人々本具の自性なり是を悟るが故に佛祖となり是に迷ふが故に衆生とある人根に利鈍あり修証に頓漸ありと雖も前來の開示秘訣は頓悟成佛の法門にして三根一圓の規則あり彼の漸々修學の二乘聲聞と天地懸隔せり心空境寂照々靈々不起一念の處を佛性と思ふは識神を本來人となし賊を子となし磚を鏡となし鍬子を眞金となすが如し是は此れ根本生死の無明にして氣息ある死人の如し自己の光明を放出して自己を返照し山河大地を照破すること能はず假令ひ大悟現成し法身明了なるも修功に染汚すれば佛道現前せず向上更にまた向上の事あるを知るべし祖師禪の如きは明鏡臺に當るも直下に打破し寶珠掌に在るも頓に擊破す磨盤空裡に走り東山水上を行く幸に一切衆生悉有佛性の因縁あり早く脚眼下一段の大事あり

と知て十二時中行く底是れ何物予坐する底是れ何物予作す底是れ何物予心是れ何物予と理に就て究め去り事に就て究め來りて只管に疑ひ勇猛に進んで三年五年退屈せずんば大疑現前して大悟せずと云ふこと亦し徹底大悟すれども佛法の大海漸く入れば漸やく深きことを知るべし若し或は菩提の成すべきなく衆生の度すべきもなまと思ひ或は一代藏經は糞を拭ふの故紙一千七百の公案一捏に足らずと思ひ果して是れ脱落不得かり見處不脱なり祖關不透なり偷心不死なり此に於て憍心慢心を抛擲して早く非を知らざれば二乗の深坑に陥入して佛祖の慧命を斷絶す聖胎長養悟後の修行實に容易ならず古人云く機位を離れざれば毒海に墮在す須く証上に修あることを知て密用西來の祖道を保任すべし錯りて所得の見を存し永く守藏の窮鬼有財の餓夫となることなかれ佛國土を現成し佛境界を見得するも一

見て再見すべからず翼くは出息入息工夫を放下し前念後念滲漏を脱盡して佛祖の骨髓を續ぎ甘露の白法びやくほふを施して一切群生を利濟し深大の恩徳に報謝すべし愚祿未熟なりと雖も遠境の相識數々書翰を以て參禪の要路工夫の用心を問ひ今秋又使札を寄せて得力の可否を尋ね同學の開示を望む仕官重役の身にして深切の志辞するに黙止がたく佛事世用繁務の中よ於て燈下よ白紙を染成し法施を慳ます祖師單傳の奥義に就て予が二十五年來の功夫を放開し自心修行の大略を記贈して行住坐臥の工夫を助け念想止觀の用心に具ふこれ予が漫説にあらず一々証據ありと雖も長文を嫌ひて之を省き只だ透脱の直路を指示するのみ定めて文字の差誤義理の前後もあるべしと雖も再看校正するに暇なし覽る人只其取るべきを取て捨つべきを捨つべし實に是れ門を扣くの瓦子なり月を見れば指頭を忘すべし魚を得ば筌筥を

すつべし不立文字教外別傳を錯まること勿れ我法妙難思かほうみょうなんしあるが故に止し々不須説ふしよふせつなり畢竟如何出息入息前歩後歩至切至精

○正宗國師示某居士法語

道情も進み勇猛精進ゆうめうしやうじんの助けにも成るべき法語等これわらは書付候やうどの御事毎度申しとされ侍べれと馳せ廻りたる仮名物の法語などは年來見及び聞及はれたる事どもに侍れば今更書付け進ずるに及はず申し進ずべき事に事を欠き彼是見合せ侍りけるよ此程珍らしき法語これありきと思ひつき荒増し書載せ進し候毫釐も添減これなき物語りに侍りぬ少しも疑がふ心なく披見いたされ勇猛精進の一助どもせらるべく候子細は老父去年の秋雲水僧侶の頼みに依りて當國松岡といへる處におゐて臨濟錄りんじやく提唱ていさうして侍りけるに聽聞の緇徒東西十三里北は甲州境を限りて毎日聚會し侍りき中に就て五六里西菴原とな

ん云へる處の人々別上て信心に聽受せられ散筵の後に三五七人伴を結びて晝夜おこたらず辨道工夫心の長に勵み勤め垂誠をなん請けて侍りてんとて老父が方へも見へ來りける人々もまゝ此ありつる中に山梨平何某となん聞へけるその所にてもおどらぬ豪家の主なるが此の男はかりは人々諫め勸れども聽受けたる氣色もなくて坐禪などは存しも依らず去る物語りなどする席をは妨かに遁け走りころすれ修行などせんずる者とはつゆ見へざりけるほどに人々も此男には點をなんかけて見限り置きけるるの時は老父が方へも折くは聞へ侍りき先月の二十四五日の事にや侍らん人を以て案内しけるは菴原なる平何某よて侍へる和尚の瞋拳をけがし奉つらんとて推參中したるにて侍る然るべく申しなして見參に入てたべなと用がましく聞へける程に愚老も立向ひ珍らしや不思議の來訪に預かり侍る子細や候ふべ

き疾く入り給ひてよと答へければ顔色の勇狀なる言語の折目たかなる見へたるばかりよ低頭作禮して告て曰く人がまじき入室事おかしくをぼさんも恐れあれど平が身に取りては老師ならでは點檢し玉はんする方も覺へなきまゝ河々の水うさあち渡頭の各々禁渡牌をひくを待かね推參仕りたるにて侍る扱も去年の秋松岡の大會の後我等の父老七八輩互ひに伴を結び志ざしを合せ晝參夜參見る人感心するばかり貴とく覺へ侍り斯りける中に御覽の通り日頃平が陋懶なる工夫は存じも依らず一枝半枝の坐禪さへ終にかいまり居たる覺へころなけれ修行の望みなどはふつと最初より思ひたえ侍り下郎が心も竊かに謂へらく夫れ見性の大事は禪門英傑の參徒頭惱を煉り身臂指を燒て十年二十年するすら少分の相應も得がたむどころ聞及びたるなれ況んや平が蒙昧昏愚なるをや迎も仕課すまじきことを強て取りか

入りて果は人々に後ろ指さしれんずらん。むげに口惜かるべき遠けま
 じきことはせぬにまかず去ればとて空しく光陰を送らんも淺ましく
 腹ふくるゝ心地すれば今日より密かに陰徳を冥々の中に積み重ねて
 以て子孫長久の計をなすべし是れ平が分を知りたる悟りなるべしと
 思ひ定めて夫よりは忍ひ忍びに徳行にもあるべき事どもを毎日二品
 三品乃至十五二十に限らずぬけつくゝりつ勸進しけるほどに人々の
 坐禪せよ工夫つとめよなど勸め導びき玉ふは結句かたはらいたく人
 の去る物語など仕出すあれば隙を見付けて遣くゝり侍りき實に時節
 因縁と云へることにや侍らん昨二十一日の晩がた用事ありて去る者
 の許へあん行しに主なる者椽鼻の柱に後さまに寄りゝりて片膝立
 て左の手をほゞづゑ突て右の手に何某法語とかや云へる仮名草紙の
 真中かい掴みて首打ち傾むけ如何にも殊勝にわいらしげと聲づくち

ひして前後を忘れほろゝと涙ぐみ讀みて居たる蟲唾走り胸惡しう
 りけるがきやつも亦た人々の中間入して屏風引廻し欸冬味噌喰たる
 貌してそら眠せんずる下繕ろひなるめり筋なき後世物語を讀ませて
 あつたら光陰を空しく送らせんより手頃に似よりたる學者なれば一
 所二所聞とがめて打つて落し吾が家秘傳の徳行に引き入れ一品二品
 つゝも善事執行なはせたらんには是れ亦た上もなき徳行ならめと思
 ひ定め笑ひなから驚歩してさしより軒端に腰うちかけて落度あらば
 聞出さんと耳を澄し目を閉ぢ手組して聞居たりけるに彼の法語に書
 かれけるは夫れ見性の大事は二年三年にして打發するあり又二十年
 三四年歴るもありまた一生打坐して打發すること得ざるもあり若
 し人精神を憤起し目を張り牙關を咬定し即今見聞覺知の性何れの所
 にか在る是れ青黄赤白なりや内外中間に在りや是非く見とけけず

ば置くまじき予と勵み進まんずるとき妄想の競ひ起ること潮の湧が如けん此時少しも屈せず單々に進みて一人と万人と戦かふが如くし去らば通身汗流れて黑暗万丈の大深坑に落入るが如く心身共に打失して呼吸の氣息も亦た泯絶し去らんこの時又當りて大事を決定すること睡夢の初めて醒るかごとく豈に幾多の時日を歴るに及ばんこの故に起信論に曰く勇猛の衆生のためには成佛一念にあり懈怠の衆生のためには涅槃三祇にわたると説き給ひぬ時々思ひ出して二炷三炷の坐を打し或ひは規矩を定めて毎夜五炷六炷の香を守る是等の類をみな是れ懈怠の衆生と名く傍はらより打ち見へたるは如何にも殊勝に貴とく自からも天晴懈怠せず退屈せずと思ふたれど如何にせん只是れ命根斷へずたとへ恚塵にして三祇劫數を歴るも見性は存じよらず自救も亦た不了なるべしと讀みつくくくと打ち聞て心

にひそかに思ひけるは不思議のこともあらんなれこの事も一日二日乃至三日の功勳にして少分の相應を得るとならば豈に一鞭を加へざらんや得力の後ち舊よりて彼の徳行を勤めたらんには虎にして翼あるものならんか若し人一日の功にして得とあらば吾れ七日の功を積まば豈に果さざらんや男子たるもの、思ひたちたることを遂げずや置くべき仕果さずやあるべきと思ひ定めて宅に皈り日の暮るゝを待かねて一室を閉ち厚く座物を鋪て結跏趺坐して凝然として坐すれば若ばらくありて妄想の競ひ湧くこと八島の戦ひのごとく九國の亂に似たり此に於て精神を震ひて妄念と相戦かふたとへは猛將一騎にて數千騎にとり圍まれたらん又大喝一聲一方を突破りて馳ぬけんぞ挑み勵むが如く又万仞峻崖の高山に上るべきに半途にして突落さるゝが如し彼の者勇猛の氣力ありて蹈むめく争ひ登ること七八分

にして突落され八九分にして蹴落さる突落さるれば逆らひ登り逆らひ登れば突落さる此時一身の氣力を尽して勵み進むとき覺へずころくとして苦み惱むこと牯牛の病にうめくが如く眼を見張りて目蓋はなれ齒をくひしばりて齒牙碎け落んとす忽然として大風の乍ち止むが如く一鍋の沸湯に一杓の冷水を洒くが如く命根截斷する事紡車の緒の切れて飛ぶに似たり此時に當て大地黒漫々是れ生なりや是れ死なりや自ら都て分つこと能はず呼吸の氣息一點も亦た無し生氣を打失するもの數刻正に天明に到らんとする頃ほひ纒かに大母指の陰々として痛むことを覺ゆ忽ち蘇息し來ればろの痛み忍ぶべからず是れは嚴しく定印を結ぶ故に二指さへへて指頭の痛めるなり急に定印を解うんとすれば四支すくんで動くことを得ず涕涙流れて額に滴たり兩眼開き張りて目たゝきすることを得ず喜ぶ處は胸襟分外に清

涼分外に皎潔たること雲霧を開て旭を見るが如し然りと雖ども一点の所得なく一点の所知なし是れ悟りありや是れ迷ひありや人々に對して一事の説べきなし只何となく大歡喜の心のみありて既に天明に到る人々に對すといへども目瞠し口健忘の人の如し家人且つ悲しみ且つ怪みて是を問へども只目を張りて是を見るのみ朋友來りて蹴鞠の場又誘なふ平即ち伴なひ行て諸友の中に入れども人事せず低頭せずたゞ目を張りて癡坐するのみ諸人みな怪しむ自ら謂ひらく誓て此度徹底の力を得ずんば死すとも休せじと日暮を待て再び又室を閉て兀坐す妄想と戰かふこと昨夜の如し舊に依て齒をくひ志はりて目を張り自ら謂らく傍人ありて燈火を點して吾が面を見なは必らず夜又のことくなるべしと既にして單々に相進めば久しうらずして再び又彼の境に入る出入の氣息一点も亦たなし前後際斷し身心脱落して大

死一番入静かり天明に到ること只片時のごとし忽然として蘇息し看
 來れば天地一指万物一馬上片瓦の頭を蓋ふなく下寸土の足を卓する
 なし此外何の禪道佛法かあらん覺へず呵々として大笑す歡喜の餘り
 遙かに來りて參禮するのみ更に一句も和尚に對して呈露すべきなし
 途中肩輿にて薩埵峠を過ぐ遙かに南溟の浩渺たるを見て始めて艸木
 國土悉皆成佛といふとを徹見す請ふ師願くは點檢せよ予が曰く即今
 佛何れの處にか在る平即はち露柱及び庭階を目視す予直に手を拍し
 て曰く兩掌相觸れて聲あり却て隻手の聲を聞くやと云て一掌を立つ
 平が曰く聞得て分明なり予が曰く何を以てか驗とせん平即ち良久す
 曰く聞くとは即ち甚だ聞く唯半片を聞得たり平即ち耳を掩ふ予が曰
 く猶ほ是れ未^み在^{ざい}平拂袖して走り出づ行と三五歩して却回して曰く聞
 得たり予が曰く作^そ麼^い生^ま平即ち所解を演ぶ甚だ諦當なり予が曰く時

細雨連日備如何か留得て一滴も泄らさざる事を得ん平が曰く未^み生^ま以
 前に止め得たり予が曰く往々に恁麼に云ふ平即ち疊を打こと一掌予
 吹くこと兩三吹して今時の作家に觸着すれば坐上大に塵を惹く平又
 低頭して出づ須臾して歸り來りて曰く和尚の爲めに十方刹土の細雨
 を止めて点滴も亦たもらさず予が曰く作麼生平即ち所見を演ぶ予微
 々として笑ふ平歡喜にたへず走りて惠昌禪尼の菴室に入りて前話を
 舉^こす尼が曰く居士少しきを得て足れりとする事なかなかれ老尼今已に
 衰^せ老^らせり人を得ざれば起つことを得ず願くば居士隻手を動かさずし
 て尼をして起しめ得てんや平茫然たり尼が曰く居士早々なることな
 かれ向きに云ふことを聞かずや少きを得て足れりとする事平慙懼して
 寺に歸る尼も亦た隨ひて寺に入り來りて前話を舉して相賀し且つ大
 笑す平忽然として入り來りて曰く適^て來^き錯^さまりて敗^は關^{かん}を取り了る願は

くは大姉再び問ふこと一遍せよ尼即ち曰く居士願くは隻手を動かさずして老尼をして起しめよ平即ち所見を演ぶ尼大に驚きて舌を吐く予即ち清州布衾の話わを授與して曰く祖々相傳底の秘訣なり謹て子細よ參究すべし容易よすることなかれ平即ち禮三拜して辞し去る右菴原の山梨平何某か纒かよ一二夜の苦吟に依て大事を發明せしこと會元かにも傳灯でんとうにも聞きよばざるためしにて實に去ぬる五月二十一日の夜の事に侍る返すくも最初の入理は急切に勵み進むに越へたることはあるべからず時々に思ひ出して少々つゝ相勤むる分際までの中々三四十年を歴ども見性は存じも依らす月日を重ねるに随ひ次第に疲れよわりて妄想情念に勝つこと能はず果ては念珠打ちつまぐりて打なき打なき念佛するより外は是れあるべからず虫齒の藥にもならざる修行なるべし誰にもせよ二度も三度も呼吸の息も絶果てゝ自

ら死生を辨まへぬ程勵み進まざればしかとしたる得力は努々是れあるべからず縦ひ一旦か因地いちぢ一下の得力これありて後も動靜の二境を嫌はず正念工夫の相續肝要たるべし次に燈籠跳りて露柱に入り佛殿走りて山門を出て人は橋上より過れば橋は流れて水は流れず南に向ひて北斗を見る等の語話掌上を見るが如く分明に見得すべし而して後に最後向上の一着あり是を法窟の爪牙奪命の神符といふ謂ゆる疎山壽塔の因縁南泉遷化せんげの話搵官犀牛の扇子翠岳夏末げまつの話乾峯三種の病是等の因縁逐一透過し了りて万里の異郷に妻子の面を見るが如くならざれば即ち眞正參立の上士と稱することを許さず右菴原の一件聞及びたる人々は僧俗共に俄りに精進勇猛の精神を震ひて勵み進むこと前日に十倍し侍る然れば則ち是よ過たる法語はあるべからずと荒増し書付進し候文字の烏焉語路の謬まりも多く侍れば努々他見之

あるべからず穴賢（畢）

明治十七年十月十三日出版御届

（定價金八錢）

編輯兼出版人

東京府平民

大内青巒

麻布區麻布本村町百九十四番地

印行發賣所

東京南鍋町壹丁目六番地

鴻盟社

賣捌所

同三拾間堀町壹丁目

明教社

同

同本所外手町

新報社

同

同飯倉五丁目

森江佐七

同

同淺艸北松山町

伊藤清九郎

